

学校通信

強い網

2016年10/11月号

新版 第82号

編集

駿台甲府高等学校

駿台甲府中学校

駿台甲府小学校

地方の事情と教育

教育顧問 酒井 徹哉

東京と北海道

十月に北海道を訪れた。北海道新幹線にまだ乗車したことがなかったので、往路は鉄道の旅となった。新幹線が開通した三月から半年ほどたったが、観光客には人気のように、混んでいるところ、地元の人々の反応はどうかというところ、意外にあっけない、というように冷たい。

これには諸事情があり、新幹線の終点が函館駅から一八キロも離れていること、東京までの所要時間が四時間〜四時間半かかること、東京行の本数が一〇本と航空機の便数と変わらないこと等があげられる。一般に、鉄道は四時間を切ると航空機に勝ると言われている。函館空港は市内から八キロしか離れていない。これでは鉄道は勝てない。札幌に行くと、この状況はもつと極端で、札幌の人々は新幹線にほとんど興味はなく、台所事情の極めて悪いJR北海道だから、札幌まで新幹線は来ないのではと疑っている人もいる。もともと本州と島という海を挟んだ地域の人々は、航空機を使った時間距離を

いまさら伸ばす選択はしない。

地方の大学事情

北海道の人は本州を内地と呼び、沖縄の人々は本土と呼ぶことが多い。表現は違うが、いずれも海によって隔られているという位置関係の他に、権力や経済の中枢から遠く離れた場所という意味が込められていると思う。

大学進学率の全国平均は五三・二％であるが、都道府県別では、太平洋ベルト地帯から離れるに従い低下していく。四〇％を下回るのは、北海道三九・九％、沖縄三八・二％の二道県である。この二地域の大学進学率が低いのは大学の数が少ないからだろうか。大学・短大は全国に一・一四一大学ある。北海道には五三大学あるが、沖縄には一〇大学しかない。北海道は沖縄の三六倍以上の面積があるので、多いとは言えない。これに対して、山梨県は沖縄と同じ一〇大学だが、進学率は五七・四％と全国平均より高い。沖縄は一人あたりの県民所得が全国平均の〇・六九倍しかなく、単純に判断できないが、経済的な事情が進学率を抑制している。北海道は、所得はそれほど低くはないが、広大な面積が通学を阻害している。

共通するのは、内地や本土に出て暮らすということのハードルが、山梨の高校生が東京で暮らすのと、経済的にも心理的にもはるかに高い。首都圏に位置する山梨県の高校生は、とても恵まれている。

防災と地理教育

昨年より高校の授業に復帰したこともあり、この夏、地理教育学会の大会に参加した。研究発表やシンポジウムではアクティブラーニングをいかに導入していくかテーマであった。

課題解決の自覚を抱いた学び（主体的な学び）とグループワークによる対話的な学び（協働的な学び）がアクティブラーニングの二大要件され、これを満たす教材開発が焦点となり、先行の実践事例が報告されていた。中学校や高校の先生方の報告は、タブレットを用いた指導法が多かった。ただ、既成の教材を用いる事例がほとんどで、オリジナルティに欠ける。

タブレットが流行だが、文科省は「タブレットを使いさえすればアクティブラーニングになるといってはいけない」と釘を刺している。

アクティブラーニングをいかに取り入れるかで悩む事例を中高の教師が報告し議論する中、ある小学校の先生が『小学校では昔から、授業は基本的にアクティブラーニングなんです。そうでなければ、授業が成り立たないですよ。』と発言した。この発言のアクティブラーニングは、議論しているアクティブラーニングとやや意味が異なるが、

教師からの一方通行の授業でも授業が成立してしまう高校教師にとっては、不意打ちを食らったような気がした。

地理のアクティブラーニングにおいては、諸課題について情報を蒐集し、その現状を認識し、その原因や対策を話し合い、最終的には政策提言にまで及ぶとしている。しかし、このレベルにまで到達することは困難であり、自らの問題として認識すること自体も難しい。そうなるると身近な問題、地域の問題を取り扱わざるを得ない。

この問題の解決策の一つが、防災教育の導入であると私は考えている。地域防災は自分や家族の命の問題として現実的に考えられる。山梨県は比較的災害が少ない地域である。内陸県ゆえに、海洋災害はまずありえない。山梨県民は、海に関わる知識が極めて乏しい。台風の季節に高潮とは何かと生徒に問うたが、ほぼ全員高波と混同していた。今年の文化講演会では津波災害がテーマになるようだが、他人事と考えずに生徒諸君にはしっかりと聞いてもらいたいと思っている。

先の学会の会場で、嬉しいことがあった。本校OGで、早大の大学院で地理学を研究している永関さんに会えたことである。卒業生が同学の志として活躍している姿を見るのは教師冥利に尽きる。

大学進学率・大学数は二〇一三年度のデータ

高校新コース・フィールド制 について

高校 副校長 筒井 揚介

来年度高校に入学する新入生から新コース制を導入し、生徒たちがより「深い学び」を実践し様々な課題に探究的に取り組んでいけるようにします。新コースの名称はコア・スーパー・アスリートで、コア・コースにはさらに4つのフィールドを設け、生徒が自らの志望にあわせて積極的に選択できるようにします。(図参照)新コース・フィールドにおいて生徒は多彩なプログラムを経験しながら、「思考力・判断力・表現力」に磨きをかけグループワークを通して「協力して探究していく」楽しさを身につけて、大学進学後の広大な研究活動に備えていけるようにします。

コア・コースの4フィールド

「グローバルゼーション」(G)は、グローバルな問題群の解決に果敢にチャレンジし、意見交換・発表を通して異文化理解を深めていきます。その活動を支える語学力を、ICT機器を駆使して伸ばしていきながら、海外語学研修や海外留学なども視野に入れていきます。「ヒューマニティーズ」(H)は、広く人間社会にかかわることを歴史や思想・文学・メディアなどを切り口に探求していきます。街に出て地域社会の活性化などを提言したり、さまざまなコンテストに作品を発表したりすることを通して、社会力を向上させてい

きます。「ナチュラサイエンス」(N)は、実験や論理的思考を通して科学的探究を進めていくフィールドで、生徒たちは自ら実験をデザインし、結果を互いに講評しあい、またプログラミング実習でロボットの動きを制御するためのプログラミングを基礎から発展まで段階的に学び、論理的思考力を身につけていったりします。各種コンテストに挑戦していくことで、得られた成果や技術力を、今後の探究にフィールドバックさせたりしていきます。「メディアカルサイエンス」(M)は、「医系セミナー」や老人ホーム訪問、さまざまな医療体験の発表やディスカッションを通して、医療に携わろうとする意志をより強固に確実にしていきます。

スーパー・コース

「日本、そして世界をリードするトップ100大学」を目指しより高度な学習をおこなうために、従来の文理合同高習熟度クラスに探究的な学びの要素を多く取り入れたスーパー・コース(S)を設けます。「東大セミナー」「医系セミナー」をさらに充実させ、学習合宿なども取り入れながら厳しい受験に耐えうる学力を身につけていきます。

アスリート・コース

従来の「スポーツ・クラス」を発展させて、強化指定クラブの選手たちを中心に自らの競技はもちろん、スポーツ全般を「科学する」コースとします。「科学する」観点は多岐にわたります。運動生理学・心理学や、スポーツ栄養学社会学などを学び、自らのパフ

オーマンズを高めていきます。また東京オリンピック・パラリンピックにもさまざまな角度からかわっていきながら、スポーツを通じた社会貢献を身につけていきます。

高1年次に多様なプログラムを体験

特にコア・コースの4フィールドに関しては、生徒たち自身が積極的に選択できるような、高校1年次の一・二学期に多様なプログラムを用意して、実際に学びの入り口を体験できるようにします。一・二学期のフィールド体



験を通して、三学期に実際に各フィールドに分かれて探究型の学習を開始していきます。フィールドの選択に関しては、本人の希望を最大限重視します。スーパー・コースは希望に加えて成績も重視します。またアスリートコースに関しては、強化指定クラブと関連をもたせているので、高1年次の最初からアスリートコースとしてスタートしていきます。

生徒の深い学びをサポート

新コース・フィールドを導入する大きな目的は、生徒たち自身で課題を見つけ、今までの知識や技量をベースに自ら思考し判断し、そして友人とともに協働して解決策を探していく、そういう「探究型」の学習、つまり「深い学び」が今後ますます重要となってくるからです。授業では、様々な形でアクティブに学ぶ機会が増え、探究したことをディスカッションを通して皆と分かち合い批評し合い、共に創り出す学びの場に授業は変わっていきます。そして、生徒一人一人が駿台甲府での学びを通して、「社会に開かれた」学修人としてさらに大きく飛躍していくためでもあります。そのために、多様なプログラムを時代に応じて常に変革していけるように、このコース・フィールド制を展開していきます。

「変わってゆくこと」

中学校 1学年主任 鹿山 さおり
 大事なのは
 「変わってゆくこと」
 「変わらずにいること」

榎原敬之 作詞・作曲『遠く遠く』
 入学式の後、桜吹雪の下で記念撮影をしたことを覚えてますか。下ろしたての制服は借りてきた服のようで、風に舞う桜の花びらと同じように、何となくふわふわした感じでした。

毎日が新しいことの連続でした。新しい先生に新しい友達、何もかもが新鮮で、気付けば桜の木々には、たくさん葉が生い茂っていました。

夏休みも終わり体育祭の練習が始まる頃には、一枚、また一枚と落ち葉を数えるようになりました。

今ではすっかり葉を落とした桜の木は、これから長い冬を迎え、翌春にきれいな花を咲かせるための準備に入ります。



季節は目に見える形で移っていきませんが、もちろん、肌で変化を感じることもできます。そんな移りゆく季節の中で、みなさんの生活も、みなさん自身も変わってきています。まず、中学生になったことで社会生

活の中での立場が変わりました。一般的には大人とみなされることが多く、いわゆる「子ども」とは区別されます。

次に、生活の場が中学校に変わりました。制服が変わり、学習方法も変わりました。小学校では許されていたことが通用しなくなり、規則も多くなっただけかもしれません。

四月になった途端に真っ向からやってきた、それらの変化の波を受け止めることは、並大抵のことではなかったと思います。中には、その大きな波に呑み込まれてしまつて、まだ沖を漂っている最中の人もいます。ただ波に身を任せているだけでは、いつになつても沖へたどり着くことはできないでしょう。長い航海になるかもしれません。灯台を指して舵を取って下さい。

冒頭にあげた榎原さんの歌詞は、環境が変わった場所でスタートを切る人を応援する曲です。自分を取り巻く環境に身を置き、それに合わせて自分を変えていくことが大事であるといい、また一方で、自分を支えてくれる家族や友人への思いは変えずにすることが大事だともいっています。

機会があれば聴いてみてください。でも、本当にこの歌の意味がわかるのは六年後でしょうね。



中高一貫校の特性を活かして

中学校 3学年主任 羽澤 健

子曰、弟子入則孝、出則悌、謹而信。汎愛衆而親仁、行有余力、則以学文。

これは『論語』の「学而第一」の第六の文章です。「若者よ、家では孝行を尽くし、外に出たら社会人の心得を持つとう。謹みある言動を行い、誠実な態度を心がけよう。分け隔てなく人に親切にして、人徳ある友人と大いに交遊をもとう。これらの事を実行してもなお余力があるのであれば、そこで初めて学問を学ぶと良いでしょう。」といった現代語訳になります。

これは学問を志す人に一つの指針を示していると言つて良いでしょう。

二十二期生にはこのような思いをもつて学習に励んでもらいたいと思つて日々教育活動を行っています。

彼らにとつて、中学校、高校生活に於いて学習はとて大切で、学習は生活の中心に据えるべきものです。しかし、それだけができれば良いというものでは決してありません。その前にやるべきことがある。ということを自覚して学校生活を送つてほしいと思つています。これは中学生である現在も勿論ですが、来年、高校生になり、ますます勉強が大変になるにつれ、強く意識してほしい言葉です。

二十二期生は第二タームの一年目を迎え、高校0年生という意識で学校生活を送っています。中高一貫校という特性を活かし、二学期からは数学が高

校分野を先取りして学習しています。順次、国語と英語が高校分野に入ります。この高校分野先取り学習の効用は大きく、彼らの勉強への意識に大きな変化をもたらしています。

高校の学習で中学校のそれと大きく違うところは、難易度です。勿論、中学校分野でも難しい内容はあります。

しかし、高校分野はそれと比にならないほどです。中学校分野であれば、今までのように授業でやっていけばできたことも、高校分野の学習ではそれだけでは容易に理解・習得はできません。授業以外に自分一人で理解するために努力する時間が必要になります。所謂「自習」の時間です。この自習の時間が増えたことが変化の一つです。

また、高校分野の先取り学習は彼らの挑戦心・向学心を育成させることにも一役買っています。確かに学習には「分かりやすい」ということが重要です。しかし、それだけだと人は物足りなくなつてしまつてしまうことも事実です。学習には適度な刺激が必要で、難しい内容、容易に解けない問題に取り組み、乗り越えることで人は成長をしていきます。この挑戦心・向学心の芽生えが彼らにとつて好ましい変化の一つ目です。

駿中の三年生は、高校受験が無い分だけ緊張感が足りないということがあります。しかし、受験が無い中高一貫校だからこそできる、高校先取り授業や実験や体験を重視した授業、受験演習に偏らない授業で、彼らは彼らなりに日々成長し、挑戦心を育みながら生き生きと学校生活を送っています。

失敗なんてへっちゃら！

小学校 PTA文化担当 大塚 絢子

毎年恒例のPTA文化部主催の行事である、文化講演会が十月五日（水）に行われました。今年度は、駿高OBである立川談慶さんをお招きして、低学年の部と高学年の部の二部構成でお話をして頂きました。会場の小体育館には、寄席の高座を真似て舞台を設け、寄席の雰囲気も作りました。

駿小では、五年生の宿泊学習で浅草を訪れたときに、寄席で落語を聞く機会があります。でも、ほとんどの子どもたちは、落語を聞いたことがありません。「落語とは何か」、「落語で使う小道具」など、落語の基本的なことも含めて、立川さんからいろいろなお話を伺いました。「落語は、お話を聞いて想像するものだから、相手の気持ちを想像できることが大切だよ」というお話がありました。

低学年の部では、落語家が舞台で使う小道具の紹介があり、扇子と手ぬぐいが、使い方によって、手紙になったりお箸になったり・・・その面白さに、低学年の子どもたちも興味津々に見入っていました。高学年の部では、五、六年生が落語を聞いたことがあることを踏まえて、お話ししてくれました。

立川さんが駿小生のために選んでくださったお話は、子どもたちもよく知っている「じゅげむ」と、「てんしき」（低学年）、「牛ほめ」（高学年）の、それぞれ二つでした。「じゅげむ」では、子どもたちが前に出て、「じゅげむ



むじゅげむ・・・」と披露する機会もあり、多くの子どもたちが元氣よく立候補したので、立川さんも観覧した保護者の方も驚いていたようでした。前に出て、恥ずかしそうにしていた子どもたちへ、立川さんから、大勢の前で話す時のアドバイスも頂きました。それは、「目の前にいる人たちはカボチャと思うこと」でした。

「落語では、いじめはない」、「失敗することがあっても、それを周りの人が理解して助け合っている世界なんだ。失敗を笑い飛ばすのが落語なんだよ」、「だから、今日は皆さんに失敗なんてへっちゃら！というワクチンを、打ちに来ました。」と、おっしゃっていました。

本校の校是である「チャレンジング・スピリット」にも通じる、失敗を恐れない心について、また、人と関わる時に大切な「想像する力」についてのお話は、駿小生にとってもかけがえのない時間となりました。

収穫祭

小学校 二学年主任 河西 さち

今年度の収穫祭は、例年までと少し変わり、午前の部・音楽発表会、午後の部・模擬店（一〜四年生）／ハロウィンパーティー（五・六年生）と、秋の行事を楽しむ一日になりました。

毎年、収穫祭を盛り上げ、中心となるのが二年生です。今年も開祭式では、伝統の「駿」と書いてある水色の法被を身にまとい、体育館内を「わっしょい！わっしょい！」と言いつつ、元気な足音で歩きました。今年度のお神輿は、大きなすんたくんをてっぺんに乗せた、駿小一四期生オリジナルお神輿。てっぺんのすんたくんが大きく揺れると、会場からは大きな歓声があがりました。

各学年の音楽の取り組みを発表する音楽発表会では、新生保育園の園児の皆さんも参加してくれ、「ミツキーマウスマーチ」など四曲を発表してくれました。一年生から六年生、合唱部、吹奏楽部の発表は、それぞれの学年や部活のカラーが出ていて、学年が上がるごとに演奏力・合奏力もパワーアップしていました。どの学年も素敵な発表でした。音楽発表会の終わりには、サプライズとして、二年生よりポップコーンのお土産を、一人ひとりに心を込めてプレゼントしました。

いよいよ待ちに待った給食です。収穫祭は、一年間の収穫をお祝いし、自然や食べ物に感謝する日でもあります。収穫祭スペシャルメニューということもあり、子ども達は給食をとっても楽し

みにしていました。田植えと稲刈りを体験し収穫したお米で作ったおにぎり。お米本来の味を味わえるよう、二つの内、一つは塩のみの味付けで頂きました。子ども達は、塩おにぎりを見るやいなや、「美味しいのかな？」と一言。一口にした瞬間！「美味しい！お米が甘い！」と満面の笑みを浮かべていました。そして何より収穫祭の人気No.1メニューと言え、豚汁です。つくし村で育てた野菜（サツマイモ・里芋）を二・三年生が、提供してくれました。「美味しい！美味しい！」の連発でした。自分たちで育てたお米や野菜だからこそ、食べることの大切さ、食べられることへの感謝の気持ちをより一層強く感じる事ができたのではないのでしょうか。

午後は、一〜四年生はクラスごと模擬店を出店しました。何日も前から、お客さんを楽しませるにはどうしたらいいのかを考え、自分達でできる範囲で試行錯誤し、取り組んでいました。

低学年は可愛らしく、中学年は前年度の経験を活かしながら取り組んでいたように思います。どの子も自分たちのお店の仕事をしっかりと勤めながら、他のお店を楽しむことができました。五・六年生は、自分で考えた衣裳に仮装し、異国のお祭りを体験することができました。

